

# 素朴心理学的な心の捉え方を 救う方策としての道具主義<sup>\*)</sup>

杉 左 近 淳

---

## 0 はじめに

本論文では、デネットの心の哲学における考え方、とりわけ彼が心的なものに与えている存在論的地位について考察する。デネットは、心的なものの実在性や自律性を強く主張する諸陣営によって、心的なもの地位を貶める不埒な唯物論者とみなされがちである。デネットは結局のところ人間を蛋白質の塊としか見ておらず、心についての言説は便宜上の道具にすぎないと考えている、というのである。或る意味でこの批評は正しい。しかしこのことをもってデネットを、チャーチランドを領袖とするような消去主義的唯物論者の一員とみなすのは性急であると、私は考える。我々が心について語ることはフロギストンについて語ることと同様全くの虚構なのか。デネットはそうは言っていない。

私の考えでは、むしろデネットは、我々の心についての日常的な語り口について、それは結局何をしていることなのかということの整合的な説明を提示しようとしているのである。そこで、以下では、信念、欲求といった命題的態度の実在論者、すなわちこれらがそのままの形で脳内の状態と

\*) 文献略称。本文中で略称を用いた文献は、全てデネットDaniel C. Dennettのものである。  
[IS]: The Intentional Stance, Cambridge: MIT Press/Bradford Books, 1987.  
[CE]: Consciousness Explained, New York: Little Brown, 1991.  
[DI]: Darwin's Dangerous Idea, New York: Simon and Schuster, 1995.  
[KM]: Kinds of Minds. Basic Books, 1996.

して実在すると考える陣営をデネットの主たる論敵として想定しつつ、デネットの心的なものについての考え方の枠組みと、そう考えることの利点とを、考察してゆくことにする。

なお、本論文では、存在論的地位が問題とされる心的なものの範囲を、信念、欲求のような命題的あるいは文的な内容を伴う心的状態に限定し、これらを「命題的態度 propositional attitude」と総称することにする。デネットが心的なものの典型例として議論の中心に置いているのは信念と欲求であり、また、心的なもの、心的状態と言う場合、その範囲には命題的態度のみならず、痛み、温かさのような感覚的なものや憂鬱、感動といった気分のような、取り扱いが難しく、また別種の問題をはらむ恐れのあるものまでもが含まれてしまうと考える方が自然でもある。こういった理由から、以下では議論の単純化のために命題的態度という呼び方を採用し、そしてこれのみを論じることにする。

## 1 命題的態度の存在論的地位

デネットは、心的なものに対して自らがとっている立場を次のように説明する。

何であれ、私の主義は、真面目な実在論者が重心などについてとるような主義である。なぜなら、私は信念（と素朴心理学からもってきたその他の心の品目）は、次のような点において—「物理的世界に備えつけのもの」の一部というよりは、アブストラクタであるという点において、そして字義通りであることの或る通常の基準を免除された場合にのみ真となるような言明に属するものであるという点において、重心などに似ていると思っているからである<sup>1)</sup>。

1) IS, p.72. ここで用いられている「アブストラクタ」という術語は、理論内での要請により構成された理論的対象を指す。その典型例としては天体の赤道や物体の重心などがあげられる。これに対し、「イラータ」はその存在を仮定されている理論的対象を指す。その典型例としては電子や透明な気体などがあげられる。なお、このような理論的対象に対し、その存在に異論のない具体的対象は「コンクレータ」と呼ばれる。アブストラクタはコンクレータを用

この引用箇所の前後で彼は、対象を志向的構えから解釈する際に帰属させられる信念状態をアブストラクタとみなす自らの立場に、以前「道具主義」という言葉を用いたため無用な論争を招いてしまったことを反省している。「道具主義」というレッテルには、いわゆる虚構主義のニュアンスが強いからである。しかし、本人の弁によればデネットは、少なくとも命題的態度についての言明に対しては、それを便利な虚構であるとする虚構主義の立場をとろうとはしていない。ここでいう虚構主義とは、消去主義的唯物論者が、現実に流通している心的なものについての日常的な語り口について説明を求められたときに口にする主張である。

これに対してデネットの言わんとするところは、命題的態度についての言明は、重心についての言明あるいは「電卓は加減乗除算を行う。」といった言明と同じく、「割り引かれた真理」としての地位をもつということであり、この立場を何と呼ぶべきかについて彼は特に新しい呼び名を提示していない。そこで本論文では便宜上、彼の弁明をふまえた上で、すなわちこの立場を虚構主義あるいは消去主義よりも一段階実在論的な立場であると認めた上で、これを「道具主義」と呼び続けることにする。

さて、志向的構え *intentional stance* という考え方の導入によってデネットが提案していること自体は、奇抜ではあるが、いたってシンプルである。デネットの考えによれば、我々は我々自身も含めた世界のさまざまな事象のふるまいを解釈し、説明し、予測するための、幾つかの異なった戦略をもっている<sup>2)</sup>。この戦略のことをデネットは構え *stance* と呼ぶ。構えの一つには、物理的構え *physical stance* がある。これは対象を、物理的な対象あるいは物理的对象による構成物と捉える戦略である。ここで用いられる前提知識は、厳密な物理科学的法則でもよいが、本来的には日常的な素朴物理学的直観のようなものと考えてよいと思われる。そして、我々は志向的構えという戦略をも有している、とデネットは述べる。これは対象を信念

いて規約的に決定され、客観性を付与される。これらの術語の出典は、Reichenbach, H. (1938). *Experience and Prediction*. Chicago: University of Chicago Press.

2) 構えについてのデネットの記述においては、本文中で説明した物理的構えと志向的構えのほかに、設計的構え *design stance* もあげられるのが普通である。しかし、本論文では以後設計的構えについて論じないので、ここでは設計的構えについての説明は省略する。

や欲求などの命題的態度を備えているものとして捉え、それらを想定することで対象のふるまいの予測や説明を行う戦略である。

そして心の哲学における彼の提案とは、或る主体が或る命題的態度をもつ、とは、それを帰属させることでその主体のふるまいが予測できることにほかならない<sup>3)</sup>、言い換えれば、或る主体の命題的態度とは、その主体に内在するものというよりは、その主体を観察する者によって、その主体は合理的にふるまうとの仮定の上で外部から帰属されるようなものなのだ、と考えるべきではないかというものである。そしてこのように命題的態度をもつものとして解釈されることで予測と説明がうまくゆく主体のことを、デネットは志向的システム intentional system と呼ぶ。

また、主体が自分自身のもつ命題的態度について考える場面を説明するにあたって、予測という言葉は使いにくいものの、基本的な考え方に違いがあるわけではない。人間は他の主体と対峙するときと同様に、自分自身についても、自らを命題的態度をもった主体であると捉えているからである。まとめると、彼の考えによれば、一般に或る主体が命題的態度をもつとは、その主体に対して命題的態度をもつものであるという捉え方による説明と予測が有効である、ということである。そして自分自身を命題的態度をもつものとみなすこととは、そのような捉え方、すなわち志向的構えを自分自身に対してもとるということにほかならない。

心的なもの全般のうちで当面は命題的態度のみを考えるとしても、以上のような、志向的システム理論と呼ばれるデネットの提案が心の哲学の状況に与えた衝撃は、大きなものであったと思われる。そもそも、心の哲学の大きな課題の一つは、いずれも自明に見える二つの前提、すなわち、

- A 少なくとも人間は（動物については意見が分かれるであろうがここでは論じない）、何らかの意味で現に心をもっている。
- B 人体は、心を生み出す脳の機構も含め、徹頭徹尾、物理的組成からなっている。

3) デネットがこの考え方を明確に表明している箇所としては、IS, p.67 における定式化(3)を見よ。

の両者を調停的に説明することである。そのもっともらしい解決方針の一つが、Aで言われる心的なものを、何らかの形で脳内の或る部分に還元、あるいはそれと同一視しようとする方針であり、もう一つはAを直接否定しようとする方針である。後者の方針をとるのが虚構主義、消去主義と呼ばれる立場であり、この立場によれば、我々が心をもっているという直観は強固なものではあるが実は誤っており、したがって我々が心的なものについて語っていることは、実は存在しない対象について語っていることなのだ、ということになる。この立場について直接検討を加えることは本論文の射程外ではあるが、デネットの立場を明確にしてゆくことによって、冒頭でふれたように、彼らとデネットとは似て非なる立場をとっているということを示してゆきたい。

前者の方策をとる立場においては、脳内の或る部分ということ、より強く、個々の命題的態度はそれぞれ個別な形で脳内に収容されていると考える立場、すなわち命題的態度の实在論と、一步引いて、脳内の或る部分ということ、脳の諸部分を機能的に特徴づけることで選別しようとする立場、すなわち心的性質（典型的にはやはり命題的態度）を一階の物理的性質の二階の機能的性質であるとする還元主義的機能主義<sup>4)</sup>の立場がある。しかし還元主義的機能主義という考え方も、つまるところ、我々が心について述べる言明は究極的には脳状態について述べる言明に翻訳可能なのだ、という形でのAの読み替えを迫ることで先ほどの課題をのりこえようとしている。つまり彼らによれば、我々が心について語っているように見える際に行っていることとは、つまるところ脳について語っていることと同じなのだ、ということとなり、この結論に限って言えば、命題的態度の实在論者と似た立場であることになる。

こういった還元主義的な考え方に対して、デネットの志向的システム理論と関係づけて私がここでとりあげたい問題点は、次のようなものである。心的性質である命題的態度を生理学的性質と同一視しようと、あるいは生

4) この立場の主張者として、ここではタイやキムらを考えている。彼らの考え方については、Kim, J. (1993), *Supervenience and Mind: Selected Philosophical Essays*, Cambridge: Cambridge University Press, Tye, M. (2000), *Consciousness, Color, and Content*, Cambridge: MIT Press/Bradford Booksなどを参照のこと。

理学的性質の二階の性質と考えようと、この形の方策によるならば、生理学的性質が自然科学に従い確定的に記述できるのと同程度に、心的性質も確定的なものとなさねばならなくなってしまう。ところが心的性質が自然科学的な性質と同程度に確定的であるという帰結は、万人が同意できるものではない。例えば消去主義者の動機の一つは、我々の心についての語り方は混乱し、避けがたく曖昧なものであるので、このようなものは将来の科学の枠組みの中に残存させるべきではない、というものであった。デネットは、結論の方向は異なるものの、心的な性質一般が生理学的な性質と同等の良き科学的対象であるとは考えない点で、消去主義者と直観を共有していると思われる。

心的性質を消去するために生理学的性質に還元しようとする、それが自然科学的性質である生理学的性質と同程度に確定的であると帰結せざるをえなくなってしまう、という点を耐えがたいジレンマであると考えれば、それを避けるために抜本的な方向転換が必要となる。かといって、前提Aを守るために、心というものを自然科学的存在論とは別の領域に独自に存在する対象として実体的に考えること、すなわち現代の心の哲学の様々な教科書的著作から神秘的二元論として揶揄されている立場をとることも、前提Bに抵触する恐れがあることに加え、言い古されたさまざまな困難の渦中への逆行につながる、危うい方策であろう。

この行き詰まりとも思える状況において、デネットの志向的システム理論は力を発揮する。この考えにおける命題的態度の存在論的地位とは、予測の道具としてのアブストラクタであるというものであり、その利点の核心は、脳の内的構造への言及を一切行わない形で命題的態度についての説明を行おうとする点にある。

ここまでは、説明を要する問題も置き去りにしつつ論を急いでしまった。次節からいま一度詳しくデネットの考えの道筋を辿り直してみたい。デネットが命題的態度をアブストラクタであると述べる際、正確には何を言わんとしているのかということと、彼が命題的態度と物理的对象との存在論的地位の関係をどのように考えているのかということ、順を追って考察してゆくことにする。

## 2 イラータ説とアブストラクタ説

我々は日常的に、例えば「このような疑いを抱いている。」「こう信じていたのでこうしたくなった。」などという風に、隣人や自らの内面の動きや行為の理由について命題的態度に言及する仕方で語っている。このような心についての語り口を、英語圏の心の哲学の分野内では、素朴心理学 folk psychology, あるいは常識心理学 common-sense psychology などと呼びならわす。素朴心理学について相互に関連する論争点は多々あり、一つには、これが我々の脳の内的状態を或る程度反映しているとみてよいか否かという問題、また素朴心理学は理論と呼ばれる資格があるものなのか、あるいは単に自分が相手の立場ならどう思いどうふるまうかを想像する模倣的な営みにすぎないのか、という問題などが盛んに議論されているのであるが<sup>5)</sup>、素朴心理学に対するデネットの態度は比較的明確である。デネットは素朴心理学を、実在すなわち脳内の物理的過程の構造にコミットしていないもの、脳内の物理的過程の実在性と対比される意味で架空の物語、フィクションに類するものであると考えている。だが、これだけでは、消去主義的唯物論者の、心的な語り口とは虚構的な語り口である、という主張との違いは分かりにくい。そこで消去主義とデネットの立場との違いを示すためにも、今一度デネットの考え方と他の陣営の考え方との比較を試みたい。

私は、1節において、神秘的二元論は脇に置くとしても、それ以外に四つの立場に言及した。すなわち、①還元主義的機能主義、②命題的態度の実在論、③消去主義、そして④デネットの立場である。ここまでで私は、

5) 素朴心理学とは心についての理論であるのか、あるいは自分ならどうするかを想像する模倣的な営みにすぎないのか、という問題は、理論-理論 theory theory と模倣理論 simulation theory との対立という形で論じられている。また前者の陣営は、システムへの心的状態の帰属の仕方を説明する際、システムは何を信じていてしかるべきかという点に言及することがおそらく不可避であるため、この特徴をもって規範理論あるいは規範主義とも呼ばれる。一方、後者の陣営は、規範性に言及することによる紛糾に関わりをもたないことを自らの長所とみなし、投射理論あるいは投射主義と名乗ることもある。デネットの考えは、概して理論-理論、規範主義の陣営に属するものであると考えられる。したがってデネットもまた、規範性や合理性についての難問に苦しめられることになる。一例をあげると、信念の実在論者からの批判としては、Fodor, J.A. and LePore, E. (1992), *Holism: a Shopper's Guide*, Oxford: Blackwell Publisher, Chap.5, 投射主義者からの批判としては、Stich, S. (1981), "Dennett on Intentional Systems," in *Philosophical Topics*, 12, pp.38-62.

①と②の陣営と、③と④の陣営との間に対立軸が存在するかのよう述べてきた。しかしここでは、1節冒頭の引用文中にあるアブストラクタという概念を用いて、①～③と④の間に存在する対立軸を指摘することになる。

乱暴にまとめるならば、①の立場は、心的性質としての命題的態度を脳内の或る部分の性質へと還元することが可能である、と主張し、②は、命題的態度は脳内に実在する、あるいは脳内の或る構造は命題的態度と同一視可能である、と主張し、③は、命題的態度は存在しない、と主張する立場である。ここで③の主張の論点は、命題的態度は、脳の生理学的な構造の中に対応物を見出されず、それゆえ実には存在しない虚偽の対象である、といったものになろう。すると③の主張は、命題的態度は、もしそれが存在するとしたら脳内に存在する、ということを含意していることになる。③はこの前件に対して極めて懐疑的であるだけであり、この条件文全体については①②と合意していると思われる。

このような立場、すなわち、命題的態度は、もしそれが存在するとしたら脳内に存在する、ということ認める立場を今後イラータ説と呼ぶことにし、これに対してデネットの立場をアブストラクタ説と呼ぶことにしたい。デネットは心的な対象である命題的態度を、そもそも脳内に存在するものとは考えていない。彼は、或る物体が物理的に存在し、その物体の形状と各部分の質量が判明すれば、そこに計算によって見出される物体の重心のように、あるいは或る天体が物理的に存在し、その自転軸が判明すれば、そこに規約的に見出される赤道の存在のように、志向的システムとそのふるまいが存在するならば、それに志向的構えをとることによって帰属させられるようなものとして、命題的態度の存在論的地位を考えている。このような立場が命題的態度についてのアブストラクタ説である。

デネットがここで重心などの例えを用いたのは、もちろん命題的態度の帰属が規約や計算によって決定できる、ということが言いたかったからではない。実際、我々は命題的態度を帰属するための明文化された規約や計算法など持っていない。デネットがこのような比喩を用いたのは、重心や赤道と命題的態度との存在論的地位には類似性があることを述べたかったからである。そこで、今しばらくは比喩的な説明を継続させつつ、デネット



が命題的態度をアブストラクタであるとみなすことの眼目について、さらに詳しく考えてみることにする。なおここではアブストラクタの典型例として赤道を例にとる。

まず、アブストラクタという道具立ては何らかの理想化を必要とする。地球の赤道は、地球が完全に球形あるいは楕球形でない以上、理想化なくしては一意的に決まるとは限らないはずのものである。地球の表面上に存在する山脈のふくらみは赤道の位置を決定する際には無視されているが、このことは当然、何ら難癖をつけられる類の問題ではない。同じことが或るシステムへの命題的態度の帰属についてもいえるとデネットは考えているのであろう。人間のように或る程度の合理性しかもたないシステムのふるまいの多少の不規則性は、無視されてしかるべきものである<sup>6)</sup>。

そしてもう一つ、命題的態度を重心や赤道に類するものとみなすことの眼目としてさらに重要な点は、命題的態度の存在論的立場はいかなるものか、ということについての見通しを与えてくれるという点である。上で述べたような理想化を行った上でならば、赤道がエクアドルの或る都市を通っている、という言明は正しいとする。だがこれは、正確には何を言っていることになるのか。もちろん国道n号線がこの都市を通っている、と言うことと同様のことではない。国道はこの都市の一部であるが、赤道はこの都市の一部ではない。また、この都市を横断する適切な一区画に赤い線を描いたとしても、その実際に存在する赤い線は、赤道と同一視すべきものではない。地球には赤道が存在し、その具体的な赤い線の位置を通っているということまでも認めたとしても、赤道はあくまでもそのような物理的存在とは異なる存在論的地位にある、ということは容易に了解できる。このことと同様に、或る人物の脳内で、「今、目の前に猫がいる。」という信

6) さらにこのことから、命題的態度が帰属される際に行われる理想化とは、記述的な理想化であって道徳的な理想化ではないということも分かる。例えば、我々が或る人物のふるまいの予測に失敗し、「彼はこうすべきだったのに。」と嘆くとき、志向的システム理論の文脈では、この「べき」は道徳的義務の意味合いをもたない。そうではなくこの嘆きは、その人物を完全に合理的なシステムであると仮定するならば、こうふるまうはずであった、ということを述べているにすぎないのであり、これは例えば、科学的実験において、数学的な理想化あるいは簡略化を経て算出された予測値と実際の測定値の誤差について語ることと類比的である。

念と対応する生理的状态，すなわちその信念が抱かれている時だけ活性化している部分がもし仮に特定されたとしても，その部分はその信念と同一視されるべきではない，ということが言えると思われる．このことは，命題的態度の存在論についてのアブストラクタ説の重要な特徴をなす論点であると思われる<sup>7)</sup>．

以上のような点に着目するならば，命題的態度を架空のイラータであるとするか，あるいはアブストラクタとして考えるか，という点において，③の消去主義者と④のデネットの考え方との違いは明らかであると思われる．

### 3 心身間の因果性

次に，命題的態度と物理的世界や物理的身体との関係についてのデネットの考え方を，別の角度から考えてみたい．命題的態度をイラータと考える陣営とデネットとの対立点が最も明確になるのは，因果性について論じられる場面であろう．したがって，心身因果性についてのデネットの見解はどのようなものか考察することは，彼のアブストラクタ説の内実を考える上で重要であると思われる．

まず，心的領域とふるまいの領域の間にはそもそも因果関係が成り立っているのか，という問題についてのデネットの見解はいかなるものだろうか．もし，命題的態度の存在論的地位について，デネットと対立する立場であるところのイラータ説をとるのであれば，それはとりもなおさず，信念や欲求は（もしそれが実在するのであれば）脳生理学的な存在者として実在すると考えることにほかならない．すると当然，或る信念と欲求をも

7) ただし，この論点は微妙である．もし仮にあらゆる命題的態度に対応する部分が人間の脳においてそれぞれ特定されたならば，それはすなわちイラータ説が実証されたことであり，このことをもってアブストラクタ説は素直に全面敗北を認めるべきだ，と考えることもできよう．だが，アブストラクタ説の主張が，我々が命題的態度について語る際にまさに行っていることは，対象の一切の内部構造にコミットすることなく，命題的態度を予測のための道具として帰属することだ，というものであるならば，このような架空の状況においてもアブストラクタ説は維持可能であるとも考えることもできる．そもそも，信念状態や欲求状態をその体内に実際に備えている対象は，志向的戦略の最良の対象の一つであろう．

っていたがゆえに或るふるまいを為した，と言う場合のこの「ゆえに」は因果的關係を示すものと考えねばならなくなる<sup>8)</sup>。

一方，アブストラクタ説をとるデネットの考え方であるが，彼は，信念や欲求のような命題的態度が物理的なものである身体のふるまいに影響を及ぼすとは考えていないと思われる。彼の考えでは，厳密な意味での因果性は，彼がイラータであるとみなす脳内の生理学的変化と身体のふるまいという物理的領域の内で閉じており，アブストラクタであるところの命題的態度は，このような物理的領域に対して原因の位置にも結果の位置にも立てないものであろう。デネットの命題的態度の存在論的地位についてのこのような見解を，レイは次のように表現する。

議論の場で流行の言いまわしを用いるならば，システムが本当に心的状態をもっているか否かについては「本当のこと fact of the matter などない」のであり，それはちょうど，空の星座についての自然的事実がないのと同じである。星座は，我々のような生物によって或る特定の角度からのみ識別されうるものであって，航海には役に立つかもしれないが，世界のいかなる現実の現象の因果関係や説明においても役割をもたない<sup>9)</sup>。

レイは，デネットのこの考え方に「パターン主義」という名を与えている。この名称に込められた論点は，命題的態度とは因果的で物理的な世界の内部において立ち現れるパターンなのだというものであろう。そして，そのパターンとしての命題的態度は，「我々のような生物によって或る特定の角度からのみ」識別される<sup>10)</sup>。さまざまな著作でデネットが用いる，コンウェイのライフゲームについての詳細にわたる解説<sup>11)</sup>は，まさにこのような考え方を説明するのについてつけのものであった。

だが，心身因果性についてのデネットの考え方が以上のようなものであ

8) Fodor, J.A. (1990), p.4.

9) Rey, G. (1997), *Contemporary Philosophy of Mind*, Oxford: Blackwell Publisher, p.77.

10) さらに詳しくはRey, G. (1995), "Dennett's Unrealistic Psychology," in *Philosophical Topics* ("The Philosophy of Daniel Dennett"), 22(1-2): pp.259-90.

11) 例えば IS, Reflections on Chap.2, DI, Chap.7 など。

るとしても、このように整理しただけでは、物理的な対象の領域と心的なものとしての命題的態度との存在論的地位について、デネットがそれぞれどう考えているのかということが分かるのみである。こういう形でイラータ説との考え方の違いを指摘するだけでは、この違いは結局のところ、何を物理的なものの範囲に含めるかということについての考え方の違いに帰着してしまうことになる。なぜなら、因果関係は物理的領域の内で閉じている、というテーゼは、アブストラクタ説とイラータ説双方における共通の前提だからである。したがって問題は、結局のところ命題的態度は脳内にイラータとして実在するのかどうか、という当初の対立に逆戻りすることになってしまうのである。

そこで、イラータ説によれば心身の因果性が成り立っているかのようにみえる場面をデネットならばどう説明するのか、という問題を考えてみたい。この問題はイラータ説を拒絶する者への当然の課題であろうし、これに答えることができ初めてアブストラクタ説はイラータ説に肩を並べる説得力をもてることになる。すなわち、心身間の還元や同一視という困難な方向に向かうことなく心身因果に見える事例を論じることができるのであれば、それはアブストラクタ説の利点の一つと考えるとよいと思われるからである。

命題的態度はアブストラクタであり、それが物理的世界に因果的に干渉することはない、というデネットの主張は、心的なものに物理的世界からの独立性と自律性を認める強い意味での心の実在論、いふなれば二元論的思考を含意するものではない。繰り返しになるが、デネットにおいて命題的態度の実在性は、物理的世界の実在性に依存するものである。そして、そうでありながら心身間の因果性を認めない点にデネットの考え方の独自性は存する。では、この問題についてデネットはどのような説明を与えるのか。私の考えでは、それは以下のようなことになると思われる。

例えば、行為主体Sが或る決意と意図とを心に抱き [(a)], 目の前のドアを押す [(b)] とする。ここでいう決意や意図は命題的態度の一種であり、一方、ドアを押すことは身体的なふるまいであると考えれば、このような事例において、命題的態度がドアを押すことという物理的な出来事の

原因となっているとはなぜ言えないのか、という問題が発生する。

だが、デネットの考え方に従うならば、ここで次のように言うべきなのではないかと思われる。すなわち、この事例で用いられた記述は、心的なものから物理的なものへの因果関係を描いたものなどではなく、(a)(b)どちらも含めて志向的構えから捉えられた人物Sの行為の記述なのである。同じ場面を物理的構えから見るとすれば、Sの脳内での変化 [(a')] によってSの腕の筋肉に信号が送られ、それによってSの肩と肘の関節は角度が変わり、その結果、前方に移動したSの掌がドアに力を伝えてそれを前方に移動させる [(b')], といった風になろう。そして因果関係は、この(a')→(b')という記述の内で閉じているとみてよい。

しかし、まだ問題は残る。物理的構えはあらゆる事象を記述可能であるが<sup>12)</sup>、志向的構えは志向的システムのふるまいにしか用いることができないという非対称性が存在するからである。先ほどの例の続きとして、Sがドアを押したことがそのドアの向こうに置いてあった花瓶を割る原因となったとしたら、デネットは何と言うのか。当然のことながら、ドアに押されて花瓶が割れたことを記述するためには、物理的構えによる物理的記述しか用いることができない。すると再び、或る意図をもってドアを押すこと [(a)→(b)] と、花瓶が割れること [(c)] との間には、心身因果めいた関係が認められることにはならないだろうか。

しかしここでデネットは、構えには使用に適した領域がある以上、或る一連の出来事の記述は、構え横断的なものとなることもありうるのだ、ということだけを認めればよいと思われる。デネットお気に入りの例である、チェスを指すコンピューターの次の一手を予想するといった限定的な場面では、我々人間は志向的構えをとることが不可避となるという彼の説明は正しいであろう。しかし、コンピューターの動作に不具合が生じ、コンピューターのふるまいを総合的に分析せねばならない場面では、我々は物理的構え、設計的構え、志向的構えを総動員するのが常であろう。

12) 当然、脳内の物理的、生理的過程については未解明の問題が多く残されているわけだが、自然主義的な論考の常として、脳の構造はすべて物理的な法則に支配され、いずれは説明可能であるという仮定のもとで話を進める。もちろんこれは唯物論的な論点先取ではない。ここではただ脳研究の完成についての楽観的な予測を述べているだけであり、心脳関係については言及していないからである。

だが、このように構え横断的な記述が可能であることは、心身因果性が成り立つこととはまったく別の事柄であろう。そして、物理的構えのみが世界を網羅できる以上、 $(a) \rightarrow (b) \rightarrow (c)$ のような、因果連鎖のように見える事例を指摘することはデネットにとって問題とならない。すなわちこのような指摘は、デネットが因果性を物理的記述で捉えられた世界 $(a') \rightarrow (b') \rightarrow (c)$ の内で閉じたものであると考え、そこからアブストラクタとしての命題的態度を排除することの、反論とはならない。

ここで議論を整理すると、一連の出来事に対して、物理的な記述 $(a') \rightarrow (b') \rightarrow (c)$ と志向的な記述から物理的な記述への横断的記述 $(a) \rightarrow (b) \rightarrow (c)$ という二つの記述が並存する、ということになる。もし仮に、真正の実在者である物理的存在に対してアブストラクタを準-実在者とでも呼ぶならば、真正の因果連鎖 $(a') \rightarrow (b') \rightarrow (c)$ に対して $(a) \rightarrow (b) \rightarrow (c)$ は同様に準-因果連鎖と呼んで差しつかえないかもしれない。しかしいずれにせよ、厳密な意味での因果連鎖はどこにあるのか、という問いに対して、アブストラクタ説は $(a') \rightarrow (b') \rightarrow (c)$ だけを指摘すればよく、 $(a) \rightarrow (b) \rightarrow (c)$ の方に頭を悩ませる必要は無い。

次の節では、彼のこのような存在論的な主張と、構えという考え方の関係を見てみたい。両者の間にはまだ、更なる説明を要する或る緊張が残されているように思われるからである。

#### 4 構えという考え方の出自

デネットが予測と説明の戦略としての物理的構え、設計的構え、志向的構えを説明するとき、彼は、あたかもこれらのうちでどれかに優越性を認めることをせず、それぞれ対等で独立した戦略として提示しているかのような印象を受ける。

現に我々は、もはや直観的な意味で心をもっているとは考えられない対象についても、場合によっては志向的構えによる語り口を用いる。チェスを指すコンピューターの次の一手を予想する例もそうであったし、また、

前科学的時代においては、複雑なふるまいを示す事象に対して科学的な説明が与えられるまでは、しばしば真剣に、その事象に対して信念、気分や意図などの命題的態度が付与された<sup>13)</sup>。

もちろん、構え採用の自由度は、戦略の有効性という点において制限を受ける。チェスを指すコンピューターの例でもそのことは説明されている。我々人間の計算速度では、コンピューターの物理的な内部構造の変化を追跡する試みも、あるいはプログラムを解析する試みも、ほとんど実際的な役に立ちはしない。しかし、この区別は対象の側にあるのではなく、人間の事情によるものである。人間よりはるかに知的な火星人に登場を願えば、コンピューターのふるまいはおろか、人間のふるまいですら物理的構えによる計算によって原理的には正確に予測できるであろう。

ただ、ここで一つ注意しておかねばならないのだが、原理的にはいかなる対象でも物理的構え、志向的構えの両方で有効な予測が可能である、ということは正しくない。この点はデネットによっても強調されている。志向的構えによる予測が有効であるシステムであるところの志向的システムとそうでないシステムとの区別は、境界は明確でないとしても、存在する。デネットは、それに対して志向的構えをとることが明らかに不適切な対象として講義室の講演台を例にとる<sup>14)</sup>。仮に講演台に対し無理矢理に志向的構えを用いて命題的態度を帰属させようとするのであれば、動かぬことが得策であるという信念とそれゆえ動かないでいたいという欲求をこじつけることもできよう。しかしこの戦略は無益である。その理由は、物理的構えをとる場合とこのこじつけの志向的構えをとる場合との間に、予測力の違いが見出せないという点にある。講演台に対して上で述べたような仕方

13) 仮に「落雷は天の神の怒りである」と考えている前科学的共同体があったとすれば、ここでは「天の神」なる主体に、例えば地上の者が不信心な行いをしたという信念や、その者たちに罰を与えたいという欲求あるいは意図が帰属されることになる。さらにはこの帰属に続いて、生贄を捧げれば天の神の怒りは鎮められるかもしれない、といった予測までなされることとなる。

14) IS, p.23.

あろうと予測することとは、予測力という点において同等なのである<sup>15)</sup>。

しかしながら、我々人間やチェスを指すコンピューターは、講演台とは違い、典型的な志向的システムであることに議論の余地はない。そして人間やコンピューターは、生身の人間の能力では志向的構えしか実際には有効ではないが、原理的には物理的構えを用いても予測ができるはずのものであった。するとこのような説明だけでは、或る種の対象群、すなわち人間やコンピューターのようなシステムについては、あたかもそれら自体としては構え中立的なシステムだが、解釈者はそれらに対してその時々により有効な予測、説明、解釈の戦略を選べるとデネットは考えている、と解釈する余地が残されているかのように見える。だが、このようなデネット解釈と、本論文の1節冒頭の引用箇所におけるデネット自身の立場表明とを見比べると、明らかに何か不整合をきたしているのである。なぜなら、このようなデネット解釈が正しいとすれば、次のような疑問が出てくることになる。すなわち、デネットが物理的对象のみを真正な実在であるとし、これの存在論的地位と彼がアブストラクタであると主張する命題的態度の存在論的地位との差別化をはかることには根拠はあるのか、むしろ物理的特性も志向的特性も、或るシステムをそれぞれ異なる構えから解釈する際に現れる特徴づけとして、同等なのではないか、という疑問である。

15) さらに想像を膨らませ、あらゆる対象とあらゆる事象に対してアニミズム的態度をとる共同体、物理的構えを知らず志向的構えしか用いない共同体を想像しても事態は同じである。結局のところその共同体においても、日常的なありふれた物のほとんどは、余計な物語を抜きにすれば、動かぬことが得策であるという信念とそれゆえ動かないでいたいという欲求が帰属されるようなものであろう。その共同体にとっても、志向的構えをとることで有効で豊穡な予測を立てられる対象群と、講演台のようにつまらない命題的態度しか帰属できない対象群との区別は存在するはずである。そして後者は、我々の言うところの物理的システムであるが志向的システムではない対象群と、相違がないことになる。

また、このように志向的システムをそうでないシステムと区別できるという点は、アブストラクタ説をとるデネットの道具主義が、心的な語り口についての虚構主義とは異なる、ということの論拠ともなる。命題的態度の帰属がまったくの虚構であるのなら、我々の講演台への虚構的な命題的態度帰属と、人間同士が相互に行っているところの虚構的な命題的態度帰属との間には、何ら実質的な違いがないと言わねばならなくなるはずだからである。



あるいはデネットは、物理的なものや命題的態度の存在論に関する議論と、構えや予想戦略についての議論とを、調停できなくともかまわない異なる二つの主張として提示しているのだろうか。そうではなく、デネットは両者を一つの主張として提示していると読むのが自然であろう。

では、我々はどう考えるべきなのか。この両者を調停するにあたっては、志向的構えをとるという能力が我々に備わった事情についてのデネットの説明を見てみるのが助けとなる。

デネットに志向的システム理論という考えを抱かせたのは、次のような素朴な問題、すなわち、進化論によれば物理的あるいは化学的な物体にすぎなかったものの子孫であるはずの我々が進化の過程でいつの間にか心をもつに至ったことになるわけだが、一体そこで何が起きたのか、という問題であったと思われる。詳細はデネットの著作<sup>16)</sup>に譲るが、志向的構えの由来についてのデネットの説明は、それは個体の生存と種の繁栄のための手段として我々が自然淘汰の過程で手に入れた、或る種の対象に対し信念、欲求その他の状態を帰属させる能力なのだ、というものであった。ここで重要なのは、志向的構えという戦略そのものが、物理的世界の中での進化論的メカニズムの産物であると考えられているという点である。

すると、アブストラクタとしての命題的態度という論点について、さらに次のようなことが言えることになる。デネットによる構えについての説明においては、皮肉なことに人間が人間でないもののふるまいを予測する例が多く用いられているため、そこでの論点は鮮明になるものの、構えの選択の恣意性についての混乱あるいは誤解を引き起こす。しかし志向的構えは、本来的には人間が人間を解釈し予測するために身につけた能力だったのである。そしてそのような予測と解釈の中に現れるものとして、すなわち物理的実在と同じ意味での実在ではないものの、物理的世界の中に、或る視点から見出される或る程度の客観性をもった解釈理論内のアブストラクタとして、命題的態度は考えられているのである。

人間に対して志向的構えという戦略をとることの有効性と不可避性は、

16) DI, あるいはKMなど。

志向的構えをとるという戦略がもつ或る利点に由来する。その利点と、超人的な計算能力による物理的構えによってさえも捉えることができない合理的なふるまいのパターンを、志向的構えは的確に捉える、という点である。

さきほどの講演台についての議論をいま一度思い出していただきたい。講演台は、志向的構えと物理的構えのいずれをとっても結局のところ両者の予測力は同じになるようなシステムであり、この点において人間のような志向的システムとは異なるものであった。だが、もし空想上の火星人が人間を物理的構えで完全に予測できるのだとすれば、人間にとっての講演台と、火星人間にとっての人間はどこがどう違うというのか、という疑問も新たにでてこよう。しかし、それでも講演台と人間は種類を異にするシステムなのである。なぜなら、人間は、志向的構えによって命題的態度を帰属する証拠となるような合理的なふるまいのパターン、すなわちそうふるまうことがそのシステムのためになるようなふるまいのパターンをもつが、講演台はそのようなものをもたないからである。合理的なふるまいのパターンとは、志向的構えの有効性を保証する決定的なものであるが、それは進化の過程、淘汰を逃れる過程で、志向的構えを我々が身につけるよりも早い段階から我々の祖先が身につけてきたものである。そして志向的構えをとるという能力は、そのような合理的なふるまいのパターンをうまく捉え、予測に役立てる戦略として発達したのだといえる。それに対して、物理的構えしかとらないと仮定された火星人は、このパターンを捉えることができないのである。

そしてこの、合理的なふるまいのパターンをうまく捉える戦略としての志向的構えという能力が人間という種に備わった時点こそが、生物進化の過程も含め徹頭徹尾物理的であるところのこの世界において心的なものである命題的態度が誕生した瞬間でもあった、というのが、上で述べた素朴な問題への、デネットなりの回答であったことになる。

したがってデネットは、構えの対象になるようなシステムとして存在論的に中立なものを想定したりしてはおらず、私が上で述べたような解釈の余地などないということになる。デネットによれば、志向的構えの対象と

なるシステムも志向的構えを用いる予測者、解釈者も、存在論的には物理的なものなのである。したがって、構え選択の或る程度の恣意性と、物理的存在者とアブストラクタとしての命題的態度との存在論的な差別化とは、矛盾する考えではなかったのである。

## 5 まとめ、デネットの方策の意義

ここまで私がデネットの方策について述べてきたことをまとめると次のようになる。まず、デネットは自然主義者として、信念や欲求のような命題的態度を、それ自体強い意味での実在、あるいは例えば魂のような実在の属性であるとは考えたくない。この考え方をとると、1節で述べた前提Bに反する二元論的な考え方に行き着くからである。それゆえ、心的なものを脳と結びつける説明の方が説得力があるように見えるものの、こちらの考え方に対してもデネットは懐疑的であった。

すると、前提Aで言われる、我々が何らかの意味で心をもっているという直観を極力生かしつつ、かつ個々の信念の存在やその内容については或る程度の不確定性が入りこまざるをえないという、消去主義者と共有する直観をも生かすためには、むしろ脳の内部構造への言及という方策は誤った一歩であったということになる。それゆえデネットはこの方策をとらなかった。そうではなく、彼は、命題的態度のような素朴心理学的概念を不確定さを伴うものとしたままで説明でき、しかも物理的なものと一切個別対応を要求しない、志向的構えという考えを導入したのである。

このようなものとしてのデネットの志向的システム理論を追ってゆくと、印象的な、そして深く関わりあう二つの特徴が見出せる。すなわち、

- (1) 命題的態度についての実在論と消去主義的唯物論との従来への対立の構図に志向的構えという考え方を導入することによって、鮮やかな発想の転換をうながしたこと。
- (2) 心の自然主義的な説明において当然必要だと思われてきた還元法則あるいは還元的説明を必要としないこと。

の2点である。

かくしてデネットは、心的なものを解釈のための道具であるとする道具主義的方策をとることになる。見方を変えれば、上で述べた彼の立場の特徴(1)(2)を一言で表現しようとする際、幾分の説明や弁明を伴いつつ現れてくるのが、本論冒頭で見た「道具主義」という言葉なのである。そして彼の方策の利点はこの二つの特徴に対応する。すなわち、

- 道具主義的方策をもちこむことによって素朴心理学的概念と自然科学的概念との全く新たな調停を行ったこと。これによって我々は、神秘的な二元論に陥ることなく、少なくとも素朴心理学的概念のうちで有効に使用可能なものは志向的構えをとる際に登場するアブストラクタとして保持可能である、ということを示した点 …(1)
- 人間は進化の産物であり、それゆえその構成物は物理的なものに尽きる、とする自然主義的主張が、困難の多い脳の内的構造への言及なしに主張可能であることを示した点 …(2)

この2点において、デネットの志向的システム理論という道具主義的な考え方は、心の哲学の分野に新たな可能性を提供していると思われる。